

詩と永遠

辻 邦生

岩波書店

詩と永遠

辻 邦生

岩波書店

詩と永遠

一九八八年六月三〇日 第一刷発行 ©

定価一四〇〇円

著 者 辻 邦 生

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五番五
発行所 緑 岩 波 書 店

電話 〇三・三六四二一
振替 東京六二六四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-002651-8

目 次

I	詩と永遠	1
1	詩的経験としての〈永遠〉の構造	3
2	詩と永遠	43
II	美とよろこび	69
3	ゲートにおけるよろこびと日々	71
4	日本の美の根底にあるもの	93
5	西行と桜	119
6	「語り」と小説の間	153

7	美と幸福について	183
---	----------------	-----

III	新しい小説のために	213
-----	-----------------	-----

8	小説家としての生き方	215
---	------------------	-----

——とくに物語形式と事実的伝達の差異について——

9	小説家への道	239
---	--------------	-----

あとがき

初出覚書

I

詩と永遠

1 詩的經驗としての〈永遠〉の構造

1

情緒について考える場合、われわれがぶつかる困難の一つは、情緒という身体的な〈事実〉を、外から、その事実在即して論理化するというのではなく、内部にあつて、その〈事実〉を實現しつつ、それを論理的に明らかにするという点にあります。われわれは喜怒哀楽をみずから感じながら、同時に、もう一人の観察者を自分のなかに設定して、それを自己分析的に眺めなければなりません。

しかし果して冷静な観察者を自己の内部にそなえた激情は、本当の激情と言えるものでしょうか。情緒が身体的〈事実〉であるとするならば、情緒を味わっている人物は、全身的にその情緒に支配されているのでなければなりません。ということは、激情に動かされている人物は、冷静な反省者を自分のなかに許容できないゆえに、激情に動かされているといわれるのです。

情緒と情緒の考察者は、眠っている人と、眠りについての考察者との関係に等しいとすれば、わ

れわれが情緒について論じることは、熟睡する人が睡眠について論じるのに似ていると言えなくもないのです。

たしかにこうした「事実」的な事柄を考察し、その構造を明らかにする場合、この種の困難、ないし矛盾が内在しないわけではありません。たとえばさまざまな宗教的・信仰的事柄について論じる場合、本当は、れわれがそのような信仰のなかへ入り、「事実」としてその信仰を生きるかどうかの問題なのです。それ以前にその信仰について論じることは単なる推測、臆測の域を出ないので、それ以後に論じることは、すくなくともそれを論じるあいだは、信仰という「事実」の外に出て、回顧的、反省的に、見る人の立場でそれを取扱っていることになります。どちらにしても、信仰という「事実」にある場合、それは「見る人」ではなくて「行う人」でなければならず、まさにその行為という「事実」を通してしか、何ものも伝えることができないのです。

れわれが「永遠」について論じる場合もほぼ同様のことがいえるでしょう。たとえば宗教的な靈感によって「永遠」を感知しえた人も、その「永遠」を伝えるためには、当の見者と同じ境地（「事実」）に導き入れ、同じ経験を通してせる以外にいかなる方法も持つことができません。宗教における行とはまさにこのような見神的経験への唯一の入路であって、そこでの言語的な伝達はあくまで行に対する補足的な手段でしかないのです。

れわれが禅語録をひろげて、しばしば内容の飛躍と論理的すじ道の欠落に失望し、時にそれを

苛立たしく思うのは、もともと打坐(宗教的実践)を通して感得する以外に、禪的境地の伝達は不可能であることを、それら禪語は前提としているからです。

たしかに「花は紅、柳は緑」というような一句を前にして劃然として世界の真実在に眼を見開かれることはある。たとえばわれわれが世界の示すそうした有様を深く感じ、なぜ花は紅であり、木々は緑であるかにながいことと思ひ屈していたまさにその折に、このような禪語に触れて、一挙に、この世の不可思議な景觀を洞察し、花々が声をあげ、木々が喜びの風に震えるのをまざまざと感知することはあります。かりにこうした「境地」をある禪的解脱の一状態と考えると、それはあくまでこの「境地」への事^い實的な転入であつて、情緒の場合と同じく「事^い実」としてあることが起つたのだと言わなければなりません。つまりそれは「花は紅であり柳は緑である」という言語伝達のレヴェルでは実現することのできない、別次元での変化が起つた、と見るべきです。

禪語はたまたま事^い實的な変貌の寸前にあつた主体に、最後の一撃となつたのであつて、あくまで言語的・論理的レヴェルで何かが明らかにされたというのではありません。

しかし、宗教的法悦にともなう「永遠」の直観とはどのようなものなのでしょうか。それは宗教に關係のない門外漢には窺い知ることのできない彼岸的事実なのか。宗教的行に励む者にも、見者の資質が与えられなければ、經驗し得ぬ超越的境地なのか。それとも一個の忘我的主観の見る幻影にすぎないのか。もし実在しうる何ものかであれば、果してその言語レヴェルでの記述を通して直観

内容の一部も伝達できないのか——等々さまざまな角度からの問いは、時間論の地平でほとんど視野を閉ざされたかに見える現在、ますます鋭い関心をもつて、われわれを惹きつけずにはおきません。ここでわれわれがやや唐突に、「時間論の地平での視野が閉ざされている」と言ったのは、時間が情緒の問題と同じく、〈事実〉レヴェルで扱うべき問題であるのに、その根底での飛躍が自覚されていないように見えるからです。言葉をかえれば、時代的な関心が時間の問題にむけられ、時間に精密な考察と分析が加えられているにもかかわらず、もつとも時間論の根源において問われなければならない〈時の発生〉に関する究明が、いわば括弧にくぐられたとき恰好で、あえて問われようとしていないからです。時間はすでに人間に与えられた事実として当初から考察の圏内に含まれている。それはあたかもわれわれが世界内に存在する一存在者として考察の圏内に取りこまれているのと同様です。しかしながら時間と空間は（とくに前者は）果して所与の事実的対象として取扱えるものかどうか。アウグスティヌスの言葉を俟つまでもなく、時間という存在を確実な存在とすること自体が一つの問題なのです。しかしどの時間論もまずこの問題を出発点にえらび、そこから時間を実在的なものと見なすことによつて（あるいは論証によつて実在的性格を明らかにしながら）時間構造の分析に向います。

現代が時間について問いかげざるをえないのは、社会のあらゆる分野における時間の、暴力的というべき支配が圧倒的であるからです。われわれはボードレルが予見的にうたつたように、「灰色

の時間の重荷に押しひしがれ、時間に追いたてられ、飛ぶような時間にすがりつき、また時間を忘却しようと努めます。つまりわれわれは時間と不幸な関係に陥った結果、はじめてこのような(時間)とは何か、と問うようになったのです。

すくなくとも現代的な時間論への関心は、フッサール、ハイデッガー以来、現代的課題の克服という意図を継承しています。しかしそれは時間構造の実体論的分析へ無限に微細化すべきではなく(現代の時間論はその傾向を示すゆえに閉塞的であるというべきなのです)、むしろミヒャエル・エーンドが童話『モモ』⁽¹⁾のなかで試みたように、時間そのものが人間的現実のなかで果してどのような存在であるかを問い直すことによって、時間を置く場を決定することが必要なのです。言い換えれば、われわれは時間から人間を割り出すのではなく、人間から、もう一度、時間を割り出してゆく手続きを考えなければなりません。

時間は現在ではほとんど自明的存在となつて実体論的な場を構成しています。すでに時間的場は、擬客観的な属性を持ち、客観的實在と等しい権利を主張するにいたっている。しかしこれら時間的場は、本来は、より広範な人間的現実の場に含まれ、包まれて存在していたものです。それがいつか逆転して、人間的現実が時間の場に取りこまれ、時間に支配されるようになってしまったのです。われわれが時間論の未来に豊かな展望をひらき、スコラの註釈ではなく本来の生産的思考を取戻すために、時間構造それ自体の考察を、さらに、時間を置く場の構造へ拡げるように主張するのは、

時間論そのもののなかに、現代的思考の最大の不幸である対象的認識の方法が忍びこんでいるからなのです。

時間・空間の自立性、中立性、計量可能性は、すべて現代的な認識と同じように、本来的な広い人間的現実を捨象し、その捨象された事柄を实体と見なしたところに成立しています。

われわれが以上のような困難をあえて冒しながら（永遠）の構造への考察を試みようとするのも時間を置く場を再構築しようとする意図を持つからです。

ただこの場合、われわれは宗教的な脱自経験^{エクスダシ}としての（永遠）を取り上げず、詩的经验としての（永遠）を取扱うのは、前者への転入が言語的レベルを超えた悟入であるのに対し、後者はなお言語により喚起された心的状態であって、われわれは詩的表現を契機としてそれを生きうる可能性があるからに他なりません。

2

現代の時間論がこうした深刻な相貌を持ちはじめたのは、ニヒリズムが文化全般に深く入りこんでいるからです。すでに前世紀後半にニーチェが（神の死）によって定式づけた形而上学的ニヒリズム——超越的、彼岸的世界の否定によって生の聖なる根拠が失われること——は、そのような（聖）の隔離によって一段と機能化された技術的能力の成果により、もはやニヒリズムが存在することを

あえて感知しえないまでに、文明現象の万般に浸透しています。われわれは日々の新聞紙上に報道されるさまざまな事件を、単純に資本主義末期の頹廃現象とのみ見ることはできず、それに似た混乱は未来を担うとされた社会主義社会のなかにも現われているのです。フランクフルが「刹那主義、宿命主義的メランコリー、画一主義的集団性(自発心の欠如)、狂信的誇大妄想、追跡妄想」と規定した第二次大戦後の社会状況の特質は、すでに前世紀に自覚された、こうした一切の価値の基準たる(聖性)の否認の結果に他ならないのであります。

われわれは現在ハイデッガーのいう現代文明の(夜)のなかで、かつて(聖なるもの)の痕跡がなお光を放っていた時代を遙かに追憶する以外に方法がありませんが、それはたとえば西洋中世の神的秩序を反映したルネサンスの一面に、たとえば次のような壮麗な映像としていきいきと生きていたことから推測されるのです。

天の星々も、惑星も、宇宙の中心であるこの地球も、

序列、階級、地位、規則、進路、

均衡、季節、形式、職務、慣習を

正しい秩序のもとに一糸乱れずまっております。

だからこそ天空高く輝く荘嚴な太陽は、

他の星のなかにあつて天の玉座につき、

その万物を癒す恵みの光をもつて

邪な惑星の悪影響をただし、

さながら国王の発する命令のようにたちまち

善意の方向を定めるのです。だが惑星が

その配列を乱して要らざる混乱におちこむと、

悪疫が蔓延し、災厄が襲い、暴動が起こり、

海は荒れ狂い、大地は揺れ動き、風は吹きすさび、

天変地異に見まわれるではありませんか。

国家の統一としあわせな平和は、根底から

揺さぶられ、くつがえされ、引き裂かれ、

壊滅するにいたるではありませんか。このように

序列が、つまり高いもくろみへの梯子がぐらつくと、大事業は成りがたいのです。

社会生活も、学校編成も、同業組合も、

海を越えて交わされる平和な通商も、

長子の相続権も、年長者の特権も、

王冠、王笏、月桂冠の大権も、すべては

序列によらざればあるべき位置を保てません。

序列を排してその弦の調子を狂わせれば耳ざわりな不協和音を生じます。あらゆるものが
対立抗争しはじめます。⁽³⁾

しかしながらシェイクスピアがオデュッセウスの口を通してこのような荘麗な宇宙と人間社会の秩序を語っているとき、すでに中世的世界観の決定的没落を告げる三人の人物の業績が近代社会に告知されていたのでした。その一つはコペルニクスによる地動説の提唱であり、それによって「宇宙の中心であるこの地球」はその秩序の支配権を放棄せざるを得なくなる。その第二はモンテーニュで、彼は人間を位階の頂点に置く中世的な自然観に対し「人間は自分が世界の泥と糞にまみれ、宇宙のもっとも悪い、もっとも生気のない、もっとも低い部分に、最下層の、天空からもっとも遠い住まいに、釘づけにされて、三つの世界の動物の中で、もっとも悪い境遇に住む動物たちと一緒に住んでいることを、気づいてもいるし認めてもいる。それなのに(…)空虚な妄想によつて、神と肩を並べ、神の状態を僭称して、他の多くの被造物の中からとくに自分だけを切りはなし、自分の好きなおりに、あれこれの才能と能力を割り当てている⁽⁴⁾」と書くことによつて人間の中世的至上権を否定する。

またマキャヴェルリは「王冠、王笏、月桂冠の大権」が何ら正当な序列に置かれるのではなく、「人間を統治する最良の手段は恐怖で嚇し、力を行使することである」という觀念を抱くにいたる。

「戦う方法に二通りあることを知らなければならない。その一つは武器として法律を用いることであり、もう一つは力を用いることである。前者は人間に属し、後者は動物に属するが、しかししばしば法律のみで不十分な場合は、力を用いる必要がある。この故にこそ君主は人間の役割を果すとともに動物の役割を引受けることを十分知らなければならない。そのどちらか一方では長く統治できないであろう」⁽⁵⁾

人間の理想的な願望を現実投射し、それを実体と信じることによって、中世的世界像が形成されてきたとすれば、ルネサンスにおける広範な人間の現実態の自覚が、かかる世界像を迷妄として破壊するのは当然です。それは人間の直面する現実の事態を仮借ない厳密さで見極めようとする「真理」への欲求によつて遂行されていきました。したがって近代社会を招来した人間中心の思考が、神の秩序に反抗したとしても、それは、ある意味で、理想的願望を投射したのと同じ人間の理想主義的な衝動によつて支えられていたと見ていいでしょう。人間は「聖なるもの」を彼岸に固定するのではなく、人間自らの行為のなかに実現しようとしたのです。その点、コペルニクスもモンテーニ